

大陸（満州）

満州国境守備隊

終戦からの脱出行(三)

神奈川県 大矢 東

脱出

昭和二十一（一九四六）年三月十日、日本晴れ。この陸軍記念日を期し前夜に決定した脱出を決行する。朝起きて、から汁を飲んで、越冬した穴の生活から脱出。携行品は小銃・帯剣・銃弾六十一発・手榴弾二発・五寸釘一本・草刈鎌・飯盒・天幕・水筒・毛布・背囊・雑囊・ロープ・草鞋である。他に高尾軍曹がピストルと双眼鏡を持っている。

そして石油缶を半分に切って釣り手をつけ、煮炊きしていた鍋に熱い灰を入れ、白樺の丸枝を火の中にさして火が消えないように持ち歩くこととする。唯一の火種である。飛ぶ鳥跡を濁さずと、穴の中を片づけて入口を閉めて出る。そして、樅・唐松を記念樹として植える。そんな思いを後にして目標を後方部隊に置いて歩いて行く。密林を歩くのもやつとだ。一日で何里も歩いていない。目と耳は一時たりとも休むこともなく周囲を警戒している。太陽は斜めに頭上を射している。二時間ほど歩いたかな。疲れてきた。すると峰伝いは終わった。

いよいよ谷から上がろうとした時、落合が、落葉が積って腐葉土となっている所に上がったと見

えて、それと一緒に滑り落ちてきた。すると蛇が自分の目の前に腐葉土と一緒に落ちてきた。とぐろを巻いて色が黒くて薄赤く、ちよつと白っぽく黒光りして気持ちが悪い。やつとの思いで山中腹に行き、二人で蛇の皮を剥ぐ。枯れ枝を集めて火種から火をつけ、蛇を焼き始めた。物凄く良い香りで、焼いた蛇は四つに分け、塩もなく食べた。何日振りかで食べた蛇がこんなうまいものかと思った。食べたとたんに元気が出た。

ようやく南斜面の日当たりの良い所に出る。すると一メートルほどのバラの木に、大豆くらいの大さきのわずかに青い芽が膨らんでいる。バラの芽だ。生のまま食べる。たった一株のバラの芽は全部とって食べてしまった。峰を歩く。常に周囲を警戒しながら歩く。晴れていて銃声も砲も聞こえてこない。これで戦争をしているのかと思うほど静かな毎日だ。

枯れ草を分け分け歩く。よく見ると蕨の枯れ葉だ。その間にまだ開いていない蕨の芽が鉛筆ぐら

いの太さに出ている。夢中になって採る。何本か生で食べてみる。木の陰に入って火を燃やし、蕨を焼いてみる。物凄くうまい。三、四時間歩いてはまた蕨を焼いて食べる。それから毎日蕨を食べる日が続く。

行く先々では水と野草があれば食べる。今度は桔梗が三十センチにも伸びているのがあった。芽も葉も一本一本引っこ抜いて採る。煮たり焼いたりしてかなりの量が食べられた。二カ月以上も野草ばかりを食べ生きている。

今日は茅野に来てしまった。腰をかけられそうな芽株を見つけて腰を下ろし、地面に少しばかり顔を出した新芽を、五つほど見つけ。そのまま噛むとほんの少し甘味を感じる。南の斜面は急な所が多い。北斜面はだらだらして、谷の水にありつくのは容易ではない。取りに行くのも一苦労だ。満州の太陽は横から照りつけるので、焼けつくように顔が暑い。晴天続きで乾燥して喉もからからだ。水を見つけないで行くのも必死だ。

穴から出て一カ月以上経ったところのこと、午後二時ころ、霧雨になった。急いで木のあるところを探し、そこに天幕を張り雨を避ける。食べる物の全然見つかからない日が続く。落合と自分の二人が代わる代わる火種を持って歩く。二時間ほど行くと蕨の群生している所に出会い採って採って採りまくる。火を燃やして早速蕨を食べる。天気も良く昼寝をする。

何日も蕨だけの食物で行軍が続く。密林の中では小鳥もあまり目につかないが、啄木鳥を時々見掛ける。砲声も銃声も何も聞こえない。平和だ。だんだん日が経つにつれ体が弱まって来る。栄養不足で衰弱して来た。大沼先輩と高尾軍曹がだいぶ疲れて来た。それでも頑張って同行している。落合と自分はまだまだ元気ではいられる。無言の行軍である。

少し歩いて谷の林の中に入ると、落合が小声で「兎だ」という。小兎だった。四人で取り囲んで兎を捕まえることが出来た。その場で料理して、手

分けして集めた枯れ木を燃やして焼いて食べた。この上もないご馳走だった。しかし小兎の四分の一ではたかが知れている。なんと骨まで食べてしまった。塩も醤油もないが、物凄くうまかった。

春になると原野は花園である。山奥にはインチュウホア(おきなぐさ)はないがりんどうがある。日本のりんどうと同じで、人が通る所に春一番に咲く花である。目につくのは山つつじである。紫色の花が、山並みの下の方から紫雲が湧き立つように遠くから見える。何日もしないうちに木の芽が一斉に若草色に変わる。次は白の花、杏が咲く。一夜にして色々と変わる。奇麗だ。歩いていると右に左に足元にと、芍薬の群生地があつたり、赤やピンクの百合の花が咲いていたり、また紫色の桔梗(ききょう)の花はインチュウホアとは違った紫色だ。少し平らな所に出ると桜草がピンク色で一面に広がり、踏みつけるのはもったいない。かわいそうな気がする。

満人は敗戦を知らされる

午後二時ごろ、人の声と一緒にジーコ、ジーコ、川の水が濁り始めて来た。急いで火を消し戦闘準備をする。息を殺してじつと待つ。やがて足音が聞こえてきた。軍人ではない。住民とすぐに分かった。二人であった。

落合が出ると満人は驚いて立ち止まった。片言で話しかけると少しは通じたようだ。落合が聞いたところによると、日本は戦争に負けたと言っているようだ、とのこと。信じられん。とにかく軍規を守ってこそ日本人である。満人は身の丈もある草原を音も立てずに立ち去った。満人を帰してすぐ、話し合いをする。村に帰ると必ず日本人の四人に出会ったことを話さだろう。小銃など武器を持っていたこと等、我々は密林に行くことを決める。

しかしなかなか思うように早くは進めない。立ち止まると白い物が動いて来て五メートルぐらい先で止まった。白熊だ。白熊は動こうともしない。

小声で「銃を撃つか」と前を向いたまま聞いた。自分には銃はない。帯剣を抜く構えはしていた。すると熊は後ろ向きになり一目散に逃げていった。越冬を終えてから、砲声も銃声もしないので昼間歩行していた。四カ月以上も敵にも人にも会ったことがない。満人に出会った以上、夜中の歩行に変えなければならぬ。無我夢中で山林の中を歩く。

山の中腹あたりで夜が明けた。空がだんだん明るくなるのが分かる。腰を下ろしてすぐに死んだように寝ついてしまった。三時間ほど経ったのだろうか。ぐっすりと寝て目を覚ますと、一枚の毛布から蒸気が立っている。朝日が山の頂上に出ようとしていた。すると、マーチョの音がカタコン、カタコンとする。一台ではない。四メートル下の山道に出るとすぐ前にマーチョが来た。やはり二台で四人乗って来た。

まず先方より「兵隊さん」と日本語で声を掛けて来た。マーチョを止めたまま小高い丘が上がっ

て、六人が円座になって話をする。聞くところによると「日本は戦争を止めた」という。聞き返す。

「負けたのか」「そうです」。我々は昨日の満人の話に間違いのなかったことを感じた。そしてソ連の軍隊は今年の四月十五日で全部引き揚げて帰って行つた。今は八路军と国民軍の内戦が場所によって少しある。今は保安隊と自衛隊が国を守っていると云つた。そして話の途中で「私達は朝鮮人です。今までと同じように満州で働いているのです。あなた方も満州で働けます」と言つてくれた。

「兵隊さん、腹が減つています。ご飯食べますか」と言つてマーチョへ行つて、八寸重箱を持つて来てくれた。真つ黄色なまさに粟飯である。四人でご馳走になつた。八月の十日ごろから米も粟も全然喉を通つていない。何カ月ぶりだ。一生忘れられない粟飯の味だ。うまかつた。「小銃など待つていると殺される。今、草を刈つて来ますから、束ねた草の中に武器を入れなさい」と一メートルもある葦を束ねて持つて来てくれた。弾

丸はやらないで小銃だけ渡して隠してもらつた。

朝日が山の上に昇つて、ちよつと稜線を見るとぴよこぴよこと動く人間が立っている。朝日を背にして、二百メートルほどの所に兵隊が我々を包围している。とつさに下へ逃げる。銃声がし始める。耳をつんざく小銃の音だ。四人とも同じ方向に逃げた。

銃声が止むと、もう我々の周りの小川の兩岸には、五百人ぐらいの兵隊が隙間なく幾重にも立っていた。全員小銃を持っている。一番に高尾軍曹、大沼兵長、落合憲兵が捕まつた。しばらくすると「大矢、もう出て来い」と高尾軍曹の声がする。葦を動かすと、兵隊二人に襟を掴んで引き上げられた。生きた心地はしなかつた。手榴弾二発・小銃弾六十一発・鎌と釘一本、武器は全部取り上げられた。

連行、取り調べ

晴天であつた。割合に暖かい。服を乾かすことになつた。兵隊が服を干してくれ、腰には毛布を

掛けてくれた。四人が集まり、色々話をしていると、一人の日本人が近寄ってきて「怪我はなかったか、銃で撃たれなかったか」と聞かれた。自分は通訳だ。生まれは東京、三浦と言う。兵隊が黒パンを一つずつくれ食べる。捕まって二日目。少しずつ心配もなくなり、我々は留置場に入れられた。

何日か経って落合が、よく見ると『牡丹江省西区警察署』と書いてあったと言う。自分達が今いる所は、旧日本警察署だったのかと頷く。自分達が入れられている所はまさに留置場であった。それにしても汚れ過ぎる。馬並みだ。馬糧の敷物とは情けなく、負けた辛さが身にしみる思いだ。

翌日の九時ごろ、出ると床屋に連れて行かれ、四人が順番に丸坊主になった。顔もきれいに剃ってくれて、自分ではないように思えた。頭が急に軽くなってしまった。床屋から帰るとコーリヤンと小豆の飯に馬鈴薯を千切りにした油炒めのおかずであった。ぼろぼろなのでよく噛んで食べた。

少しずつ慣らして三日目ぐらいには食べられるだけ食べるようになった。

三日目の朝九時ごろ、食べ終わると一番に落合が呼ばれて行った。落合は留置場の高窓から小さく折った紙を投げ入れてくれた。見ると「調べられた山の中に武器や自動車がある等と言うと、再度その場所に連れて行かれるから言ったら駄目だ。あと特技を言ったら駄目。小銃の分解等も駄目」と書いた紙切れだった。

二番目の自分も知らせてくれた通りのことを聞かれ、「自分達は満人達とは戦争も何もしていない」と言ったら、「そうか」と言って十分ほど調べは終わった。大沼先輩は病院へ行くことになった。その日の午後、落合氏が再度呼び出され、保安隊の通訳に行くと挨拶にきた。いよいよ高尾氏と自分の二人になってしまった。

帰 国

終戦一年後、昭和二十一年八月中旬のことである。午前、保安隊よりの通知で、荷物をまとめ集

合してくれということだ。落合氏も出張から帰り、大沼氏も病院から帰って四人が揃った。お互いに助け合いながら牡丹江だと思ふ河の土手の上を、集合場所目指して一生懸命に歩き牡丹江の收容所に集合した。

八時半ごろか、疲れ果ててようやく起きる。芝の公園と思つていた所が葉草の公園になつている。集合してから、誰が指揮を執っているのか全然分らない。ただ、薄水色の小旗を持って先頭を歩いている五十歳ぐらいの小柄な汚れた背広を着た人がどうやら指揮者か隊長か、と我々は思つた。ただ後をついて行く。

駅の広場にはもう何百人もの人が着いていた。保安隊の軍人が小銃を持ち、我々の方に向かって銃を構えている。薄気味が悪い。二十人ぐらいずつ並ぶと、そのそばから若そうな元氣な男子を引き抜く。五十人ぐらい集まつた。その中に自分も入つた。兵隊が我々の周りを三メートルぐらい間を置いて、銃を構えて囲んでしまつた。

通訳が話し始めた。「皆さんは中国の軍隊に入つてもらう」と聞こえて来た。駅の貨車の方を見ると、仲間の三人が手を振っている。とつさに「自分も行かなくては」と腹を手で抑えてオデューピンと言つた。腹が痛いからと便所へ行かせてくれた。便所の裏を回つても、至る所に足の踏み場もないほどに糞だらけになつている。みると兵隊の背中が見えている。戦友の方へ駆けて行つても、後ろ向きの兵隊は気づかないだろう。「大丈夫だ」と思つた。出発の汽笛がボーボーと三回鳴つた。汽車に駆け寄り、ようやく戦友の手につかまつて飛び乗ることが出来た。息切れも治まつて、安心して、戦友と別れ別れにならなかつたことを嬉しく思つた。喜びを噛みしめ感謝した。

広野を汽車で南下

吟爾賓の駅を出発すると、鉄道は少し左に迂回し、何回も汽笛を鳴らして行く。今度は汽車の動きが違ふ。気持ち良く早く、すいすいと滿州の広野を南下する。貨車の中に横になり晴天の青空を

見て目をつぶると、色々頭を巡る。両親はどうしているか、兄は戦死したし、弟は親孝行しているだろうか、姉妹はどうしているか等と思いを馳せ、込み上げて来るものがある。

汽車は早くて静かだ。今までと違って鉤を持つた満人が荷を襲うこともない。線路のそばには誰もいない。銃を持って線路を守る兵隊もない。朝から夕方まで分からないほど広々とした広野を汽車はすいすいと南下する。

牡丹江を出発して十日ぐらい経った九月の三日午後二時を回ったころ金州に着いた。貨車は荷物を下ろして、空になって戻って行く。思わず貨車に一人頭を下げた。ありがとう。

集会場まで二百メートルあるかないかの所へ案内された。日本の住宅か官舎のようだった。五十軒ぐらい立ち並んでいた。一戸の家に三十人ぐらいお互いのグループで入る。先の者が捨てたと思われる不要のものを、まず入る前に動ける者がさつと片づけた。ようやくちよつと落ち着いた気分

になった。そして話があるまであまり遠くに行かないようにとの指示があった。

乗船を待つ

金州に着いて三日目。「大矢さんという神奈川県の方がいますか」と呼びに来た。ついて行くと引揚者の援護局事務所だった。事務所には女子の事務員が五人ぐらい、男子が五人ぐらいいた。その中の一人が「君が大矢さんか。神奈川県の間を知っていますか」と自分に聞く。「自分は座間の栗原です」「私は相模原町座間の稲垣許四郎の家の方です」。元座間村の村長ということはすぐに分かった。「頼みたいんだが、この手紙を持って行ってくれないか」と言われて仲間の室に帰った。

金州に来て船が出るまで使役に出された。食物を運んだり掃除をしたりである。室の中に籠もっているも退屈するばかりなので、船が出る一日前まで働いた。前日に百五十円くれた。嬉しかった。援護局の周りに軒を連ねて出ている屋台に行き、今日は最後の日だとチャン酒を飲み、支那そばを

食べる。百五十円は二回で全部使ってしまった。

コロ島に着いて二日目、大沼氏が言い出して、戦友の遺髪を一緒にして届けることにした。大事に紙に包んで服の内に納めた。必ず届けなければならぬ責任を改めて肝に銘じた。

引揚の乗船の時に日本の貨幣は四千円までしか持って行けないと話があった。それならばと、最後の二日ばかりは飲み歩いて金を使った。便所には富士山の絵のある五十銭や満州の軍票などを、落とし紙として使つてあつたりした。軍票と円を交換してやる、と言つて歩き回つている満人も大勢いた。聞くと百分の一ぐらいなので、馬鹿馬鹿しくて落とし紙にでもしてしまえ、ということになつたらしい。

コロ島から待望の乗船

いよいよ待望の乗船の朝を迎えた。澄みきつた青空、輝く太陽、今日コロ島から出る。中国とも満州ともいよいよ別れる。嬉しい。しかしどこかに連れて行かれるのではないかという一抹の不安

と何となく未練のようなものも複雑に心に残つた。一度に千五百人ぐらいの乗船だ。大声を出したり、人を罵つたり、喧嘩をしたりする者はいない。夫婦だと早く乗船できるからと、ちよつと年増の婦人がいつとき連れになつて欲しと頼みに来る。その婦人達は人混みに紛れ分からなくなつてしまつた。

船はアメリカ軍の上陸用舟艇であつた。船尾が物凄く大きな扉になつていて、戸がガラガラと下に降りて来て、そこから乗船する。鉄板のごつごつとした車の滑り止めがある。中には何も無い。がらんとしている。大広間だ。四力所か、階段が角にあり、甲板に出られるようになってゐる。一階の広間には莫蔭が敷かれ、中央の通路には何も敷かれてないが、横は何力所も通れるようになってゐる。

船内は急に騒々しくなつた。日本の島がはるかに遠くに、海上にわずかに浮かんでいるのが見える。家も肉眼で小さく見える。日本を見ているうちに

船内は静かになつて来たが、船尾は急に方向を変え左に九州の島を見て、静かに南下して行く。

九州の海岸の小高い所に「日の丸」の旗を見つけた。甲板にいる男、元軍人は大声が自然に出た。

「おお、日の丸だ、日本の国旗だ」と。みんな喜んだ。長い間の色々な思いを振り返りながら、ひるがえる日の丸の旗を甲板から見つめる。船はどんどん南か西に動いている。

太陽が西に傾く。船は船尾を左に切ると、今度は島が、木が、家がよく見える。いや、人のいるのも見える。船は右に左に動いて静かに進んでいる。小舟・大船・軍艦（米国）がいる。

山の中腹に佐世保港と黒字で書いてある。それを見つけた途端「万歳！」と叫ぶ。船は先に進み港の一番奥に入った。船は止まり、碇が凄い音を立ててガラガラと海の中に下りた。もう船は縦にも横にも全然動かない。

【解 説】

体験記筆者は、当初、満州第一国境守備・第四地区派遣、第七七七部隊砲兵第三中隊部隊に入隊するが、同隊はその後第二、第十国境守備隊を加えて独立混成第三百三十二旅団が編成された。終戦も間近な昭和二十年七月の満州であつた。

そして、約一カ月後の八月九日、ソ連軍が侵攻し、所属部隊は四散し、戦友数人と共に長い苦難の脱出行の末に、ついに帰国を果たしている。

筆者は、この脱出の模様を二回にわたり記しているが、本編では翌年の三月、僅か四人となつて越冬した穴の生活から脱出、そして終戦を知り生還を果たす記録となつている。

日本へ帰国の船が佐世保に入ると、山の中腹に「佐世保港」と黒字で書いてあるのを見つけて「万歳！」と叫ぶ。筆者は「船は先に進み港の一番奥に入った。船は止まり、碇が凄い音を立ててガラガラと海の中に下りた。もう船は縦にも横にも全然動かない」と、もう再び戻る事のない船に感慨ひとしお、長かった脱出行の後の安堵感を述べた。

しかし上陸した後、佐世保港での停泊は十四日に及びようやく下船するとDDTの洗礼を受ける。九月下旬である。

海軍の倉庫のような中に案内され、上陸の祝い酒としてウイスキーが出て、我を忘れて五時間ぐらい寝た倉庫内は千五百人もの人々が思い思いの朝を迎えている。

「初めての日本の朝だ。嬉しい」との実感が出て、三方に囲まれた山の上に赤々と朝日が出ようとしており、思わず拍手を打って拜む。

筆者は、ここで我が家へ帰ってからの一幕を次のように語ってくれた。

『自分は持つてきた物を一つ一つ話しながら出した。まずバケツを三つ。牛に餌や水をやるのに使える、と言うと、親父さんは嬉しそうに「そうか、そうか」と言った。つぎに五、六本の針を見せる。これは帯剣と石で作ったのだと言うと、じつと見つめ、針めどを見て驚いていた。雑嚢と飯盒・水筒・手作りの背嚢・毛布一枚・天幕一枚と

戦友の越智さん宅でもらったコーリヤン一升を出した。

靴は今日限りで、もう履くことができない。底が穴あきで、履いてもまるではだし同然だ。軍服は火玉穴で何十カ所もの穴だらけだ。

着るものをはじめ、すべてが二度と体につけられない。見すばらしい乞食同然の姿に、親父はじつと見つめ涙を堪えている。そして、時々大きく息を吸っている』

これが満州国境から自分で脱出した物語の後日談である。